

大谷大学学監時代の訓覇信雄師(前列左から4人目) 写真は1944年、山辺習学学長の大学葬

大谷大学学監時代の訓覇信雄師(前列左から4人目) 写真は1944年、山辺習学学長の大学葬  
のの流れを汲む、近代教学の

のの流れを汲む、近代教学の  
はどこまでも清沢満之の精神を受

はどこまでも清沢満之の精神を受  
ののではないだろうか。

で、訓覇信雄師は1906(明治39)年三重県菰野町に生まれた。訓覇師は、1930(昭和5)年、大谷大学を卒業。なおこの年は曾我量深師が、著書『如来表現の範疇としての三心観』に対し侍

たあとには草も生えぬ」と悪評される。その後約一年間「教化研究所主事」を務め帰坊する。この年、大夕張炭鉱へ東本願寺主催採炭労働奉仕隊を派遣している。『東本願寺北海道開教百年史』には「戦局緊迫に伴い両本願寺は力を併せて宗教報国責務を果たさんがために」と記されている。また、報

正統性を宗門に示した。しかし、修練道場の厳しさを宗議会で問題視され、また蓮師450回御遠忌法要厳修にあたって、明確な形では示されていないが、宗門の戦争責任を含む時代社会の要請に

け継ぐ信仰運動といえるであろう。水島見一氏は、「何故、同朋会運動が必要なのか―清沢・曾我・金子らに学ぶ―」と題した講義(三条教区住職研修会)の中で、清沢満之を同じく出発点とする二つの流れを示し、清沢満之―曾我量深―金子大柴―安田理深―松原祐善を教学派、また、清沢満之―暁鳥敏―高光大船・藤原鉄乗―訓覇信雄を生活派としている。さらに「訓覇先生は曾我、金子を教学的な師と仰ぐ。しかし、訓覇信雄と言いますと、これは絶対に忘れられない方として高光大船がおられる、訓覇先生は一番直接的には高光大船によって仏道に目覚めたのです。どういう形で仏道に目覚めたかと言おうと、「仏教は考えてわかるものではない」ということを知らされたのだと述べている。「全生活をあげて本願念仏の正信に立っていた」ための運動である(『真宗』1962年12月号巻頭文)と標指した訓覇信雄師にとっての同朋会運動は、ここから始まったのではないだろうか。

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」  
教区御遠忌テーマ「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

# 教化本部通信 【第43回】

真宗門徒の生活 朝夕におつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しましょう  
を回復しよう すずんでお寺の法座に身を運びましょう・報恩講を大切にお迎えしましょう

## 真宗同朋会運動50年に向けて

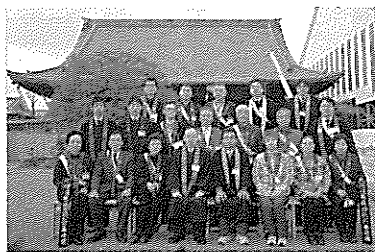
その検証 興り(四)

真宗同朋会運動提唱者 訓覇信雄(その1)

教化本部 古卿 誠幸

真宗同朋会運動50年に向けた運動の再検証。本号は「興り」の4回目。訓覇信雄師の同朋会運動提唱に至るまでの師の背景について掲載する。  
また今回の「点描」は、前号に引き続き、1963(昭和38)年の「育成員研修会」における訓覇師の講義録を掲載する。

徳川幕府と緊密な関係を保ってきた東本願寺に対して、明治新政府は不快感を強く持っていた。さらに神道主義教化をしめし神仏判然令を發布した事から、全国的な魔仏毀釈がおこった。それに対し、東本願寺は直ちに維新政府へ傾斜を大きくしていった。それが莫大な献金であり、北海道開拓事業、外地布教であった。そしてそれは、国家主義に迎合し、戦争に協力する方向に向かっていく事でもあった。日清戦争(明治27〜28年)、日露戦争(明治37〜38年)には、軍隊布教をはじめ、戦争を「聖戦」とする動きもあり、それがやがて太平洋戦争へと続いて行く。こうした国家の国粋主義的な時代の中



千歳空港雪のため、帰宅が3日間遅れました。帰れたことが本当に嬉しかったです。



聴いて語って、出会いの深まりを感じる3日間でした。

▼奉仕団 2月▲  
2/18〜20  
教区後期教習奉仕団  
教区帰敬式奉仕団

5名 10名

2/28〜3/2  
第18組 教区指定推進員養成講座  
同朋の集い後期教習奉仕団 28名

宗祖親賢上人七百五十四御遠忌  
お待ち受け総上山